

令和4年度第1回

香美市総合教育会議議事録

日時 令和4年9月21日（水）

午前9時00分 開会

場所 香美市役所3階会議室2

令和４年度第１回香美市総合教育会議

日時 令和４年９月２１日
午前９時００分から
場所 香美市役所本庁
３階会議室２

次 第

１．開会

市長あいさつ

２．議題

- （１）物部町の活性化について
- （２）ＩＣＴ教育について
- （３）学校紹介について

３．その他

４．閉会

川田総務課長 おはようございます。定刻より早いですけれども、委員さんお揃いですので、ただ今より、令和4年度第1回香美市総合教育会議を開会いたします。本日の進行を務めさせていただきます総務課長の川田です。よろしくお願いいたします。
それでは、開会に当たりまして、市長よりご挨拶を申し上げます。

依光市長 おはようございます。初めての会ということで、改めまして、4月より市長として就任させていただきました依光であります。皆様方には大変教育行政、いろいろご指導いただきまして、ありがとうございます。私も先日は山田小学校、また鏡野中学校を見せていただきまして、香美市の教育という現場も見せていただいて、先生方がしっかりと頑張られている、また特色としては、やっぱりICTというのが入ってきていること、また外国人の先生がいらっしゃったりとか、自分が小学校、中学校の時よりも、大分変わってきてるなあということも感じます。

また、香美市の特色としては、地域と連携してということも非常に進んでおるように考えております。私は、この教育ということを非常に大事にしていきたいと思っておりますし、また小、中、高、大、それに社会人も含めて、みんなでまちづくりを学び合って出来るような、そんなところで頑張っていきたいというふうに思っておりますので、引き続き香美市の教育につきまして、ご指導いただきますようお願いいたします。冒頭のご挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

川田総務課長 ありがとうございます。それでは、本日の会議を次第に沿って進めさせていただきますと思います。

議題は3件ございますので、1件ずつ説明をして協議をしていただきたいと思います。

それではまず、議題1、物部町の活性化についての説明をお願いいたします。

公文教育振興課長 それでは、物部町の活性化における教育委員会の取組みのポイントについて、ご説明をさせていただきます。

物部町保育園及び小学校、中学校等活性化検討委員会からの中間提言としまして、1. 特色ある学校づくり、2. 幼児・児童・生徒数を増やすための方策、3. 物部の魅力づくりと情報発信 という3点につきまして、以下の提言を受けております。

中間提言は、令和3年3月に出していただいたもので、教育委員会に報告を行いまして、議会、課長会、物部町保・小・中コミュニティスクール、物部町自治会長会等、各種関係機関に中間提言についての内容等の報告と説明を行いました。

た。その後、教育委員会として早急に取り組む事項として、山村留学、特認校制度について進めていくことを確認して、令和3年度は以下のとおり、活性化検討委員会、物部町にも働きかけをして進めてきたところです。

保育園、小学校、中学校の動きとしましては、保育園では物部ならではの特色ある就学前保育・教育についての研究・実践を行い、小学校、中学校については、物部ならではの、ほかにはない大胆かつ魅力ある教育の実践という研究をさせていただいております。令和4年度に移りまして、市長も先ほどご挨拶にもありましたとおり替わられましたので、4月早々に、市長に物部町活性化の進捗状況の説明をいたしたところです。その後、8月24日に教育委員会定例会におきまして、大柵小中学校の特認校について、承認を得たところです。

予定としまして、物部町活性化検討委員会を開催し、今後の進め方、一定提言等もいただいておりますので、何時を目途に解散をしていくか、そういう方向性を協議していく予定であります。また、物部町の活性化に向けて、中間提言の内容について、関係各課で今後の展開を協議予定としております。

課題といたしましては、1つ目に、物部町の活性化については、教育の分野だけでなく、香美市としての取り組みを進める必要があるため、今後、市長部局での取り組みにどう繋げていくか。また2番目としまして、山村留学導入に向けて、生徒募集の広報、市外から生徒を受け入れるための体制づくり、3番目に、大柵保育園の園児減少に歯止めをかける施策の実施、4番目に、物部地域での魅力ある教育の推進・発信ということを上げさせていただいております。

次のページは、山村留学と特認校制度の具体的なスケジュールです。山村留学につきましては、令和4年度、教員住宅の寄宿舍への転用に向けて改修設計・工事の予算計上するための準備をしているところで、設計は11月末を目途に行っています。あと山村留学に向けての要綱、実施計画、条例策定等進めてまいります。地元と具体的な支援について、協議も進めていかなければならないと考えております。令和5年、令和6年に受け入れを始めますので、この予定のとおり、進めてまいりたいと思っております。

特認校制度につきましては、先ほど申しましたように、8月に承認を受けまして、このパンフレット、まだ案として届いてはやはやのものですけれども、こういうものを広報と一緒に、全戸に差し込んで配布する予定になっておりまして、令和5年度4月からの受け入れに向けて、準備を進めているところです。

簡単ではございますが、以上です。

川田総務課長

今説明が終わりました。それでは、皆さん自由にご意見等を出してもらえればと思います。よろしくお願いいたします。

宮地委員

そしたら、私もずっと長い間このことについては関わってきましたので、補足したいと思います。

かなり時間を掛けて、ここまで進んでまいりました。結局一番何が大事かと言うと、勿論学校とか保育園も大事なんですが、地元のご理解、それから支援といったものが無いと、もうこの制度は進めていけませんので、やはりそれに随分と力を費やし、地元の協力を仰いで来たところです。公文課長、随分苦勞されてやってこられていますけれども、やっとそういったことが可能となって、今現在の進捗になっておるところでございます。

前にもチラッと市長さんにも言うたんですけど、10年ぐらい前にも中学生を修学旅行で東京へ行って、銀座のど真ん中でユズ売ってこいって言ったのが、実は今までずっとそんなこと言ってまして、だから思い切った新規軸を出して、しっかり物部町の存在を広く知っていただく、このことが一番大事になってくるんじゃないかと私は思っております。ですからこの、今触れております山村留学にも関係してくるんですけれども、山村留学、引いては移住っていったものにも視野を広げながら、いわゆる教育委員会だけじゃなくて、香美市としてのやっぱり総合政策と言いますか、そういった部分までこう持ってこない、教育委員会単位ではなかなか難しい分もありますので、やはりそういったことをしっかり睨みながら、着実にこれを実施していきたいと。

まずはやはり特認校、来年度からどのくらい子どもさんが来てくれるかちょっと分かりませんが、これから努力をしていくところ。そして、その次の山村留学については、かなり思い切った情報発信をして、しっかりこの香美市、物部町といったものについてご理解をいただいて、子どもさんに留学をしていただくという、これから山村留学に対する手立て、いわゆる生徒募集までの、手立てをどうするかということが当面課題になっておりますので、そういった移住も睨みながら、着実に進んでいきたいというふうに考えておるところでございます。

以上です。

川田総務課長

その他にご意見ありましたら順次どうぞ。

浜田委員

宮地委員が言われたように、今物部町での取り組みとして、教育委員会のほうが先行してるんですが、本来言うと、やっぱりそこに暮らしがあって初めて、子ども達が学校へ通えるのが本来の姿です。暮らしがあるということは、そこに営農施策とか、人口が多分減っていくだろうけども、若者が定住しやすい雇用の関係の部分も増やすとか、そうしない限りはなかなか外部外部ばかりではなかなか難しい面が出てくると思います。今はぎりぎりの部分でもう遅いぐらいなん

です。今の取り組みは、教育委員会が前面に出て、山村留学とかいろんなことをとり始めるけど、実際市長部局の中でその部分の評価を更にしていかないと、なかなか難しいかなと。同時に、教育委員会がやってる部分の支援の拡充をしていかないと、全国で同じような取り組みをやられてますので、やっぱりそこで先行する。もう先行じゃないかもしれないけども、優位性を保つという部分においては、やっぱり全面的な支援が無いと、なかなか出来ないんじゃないかと思ってます。

依光市長

無ければ自分のほうからちょっと。

ちょっと進み方がどういうあれなのかって。まあ宮地委員がおっしゃられたとおりだと思ってまして、やはり物部に対してしっかりと市長部局として、こういうふうにやっていきますっていうのが無いと、なかなか教育委員会だけの話ではないというふうに思ってます。

その中で1つは、何を売りにしていくかっていうところを地元の方々とも話をしていかんといかんところですけど。1つにはやっぱり物部の生活、或いは中山間の集落の暮らし。例えば工科大生とかが今、神池に行っているいろいろと生活してて、大学生はいろいろと地域の人を助けようと言ってるんですけど、神池の人はほんとに余り困ってなくて。水と食料とエネルギーを代々こう受け継ぎながらやってるので、凄く何て言うかな、人としての強さがあって、まあ災害があっても大丈夫みたいな。ある意味大学生にとってはいい経験をしてるんじゃないかなと。だからそういう意味で行くと、だんだんだんだん、こう日本人らしさが失われてきてると思うので、今、移住でコロナもあって、都会から来てるという人もいるんですけど、意外と定年退職の人が来るというよりは、やっぱり若い世代が来ると。時代の流れがSDGs、脱炭素、要するに燃料を使わずに生活が出来るのがいいよねっていうような世界になっているので、そういう意味で言うたら最先端になるんだろうと思っているんで、そこは1点ベースに持ちながら。ただ、そう言ってもなかなか分かりにくいので、1つはICTというところをやっぱりしっかりやっていきたいなと。大栃周辺は今5Gが、ドコモが入っているそうなので、ちょっと企業誘致、IT企業とかとも話をするように。11月に東京行ってスケジュールがちょっと空きそうなので、自分も東京でベンチャービジネスというところの近くにおったんで、そういう企業にも話しながら、なんか実証実験みたいなことをやっていきたいというふうに思っています。

それと、大栃高校で何か出来んかということで、県教委の建物なので、香美市がもらうと結構大変な、財政的な負担になるので難しいんですけど、けど何かせんといかんということで、今度の市長会で話をするようにしてます。まあ大栃高校も何か活用方法と言うか、地域で何かやりたいという時に、じゃあ使えますよ

っていう態勢を持っておきたい。

それと、もう1つが住宅政策というところで、まあ寄宿舍の話もあるんですけども、ファミリー向けの古民家を出来るだけ確保したいというふうに思ってます。なかなか今の空き家バンクの制度で言いますと物件が出てこない。要は住宅自体を手放すのにやっぱり抵抗があるんだと思うんです。そういう意味で言うと、空き家活用促進事業って自分もずっとこの県の時から言ってたんですけど、市町村が10年間借り上げる仕組みがあるので、来年度から10年間だけ貸してくださいっていうような形で住民の皆さんに声掛けをし、改修費用は行政がやりますっていうのを来年始めるように今準備をしています。梶原町とかが先行してやっているので、梶原にも担当には話を、まあ梶原の担当者が来てくれたんですけど、そこで話もし、あと室戸でも先行してるのがあるので室戸にも行ってもらって。そこは一定準備しています。

それともう1つ、これも余談みたいな話なんですけども、大栃の新しいものにチャレンジするDNAっていうものがあると思っていて、何も無いところからでも、ゼロからでも作れると思っているんです。それは何かと言ったら、自分が南米のパラグアイのイグアスに行ったことがあって、そこで公文さんに会ったんですよ。公文かねじさんという、移住されて、村ごと行った方の息子さんが今いらっしやって、時々日本に帰って来られてるんですけど。本当に何も無いところから、ジャングルの森を切ってまず、ほんでその切り株の間にいろいろ種を植え、だんだん切り株も取りながら畑を広くしていってみたい、何かそういうのを物部の人がやったとか、そういう話を聞くと、まあまちづくりって本当にゼロ、思いがあれば再生するんだなということをまざまざと見せられて。余談ですけど土佐弁が通じる外国ということで、それは不思議な感じもしたんですけど。相撲とかも大事にしてやってるんですよ。で、田舎寿司みたいなものも出してもろうたりとか、やっぱりそういう食文化も、日本のほうで残しておかんと、なんか南米のほうにあるって変な話やなと思って。これは余談の話ですけども、自分は全然あきらめてないので、ちょっとスピードを上げて、自分自身はやっていきたいと思ってます。しっかりやるということを、決意を述べさせていただきました。

川田総務課長 市長からお話がありましたけど、その他ご意見とか、先ほど市長が言われたことに対して、何かございませんでしょうか。

白川教育長 小松委員さん、地元ですがどうぞ。

小松委員 昨年も申し上げたんですけど、物部町の活性化の検討というテーマが合併以

来、教育委員会で出たのが初めてです。私も支所長もやりましたが、なかなか活性化というのが難しい要因として、1つは地元の人材がいません。高齢化が進んで、人材っていうのはもう転出しています。香北町とか土佐山田町とか。それに、若い移住者も定着しないのが現状です。移住については幾つか要件があると思うんですけど、仕事と住まいですね、あとコミュニティ、あと教育環境、これが必要になってくるわけですけども、仕事と言っても森林組合へ行くか土建業者へ行くか、あるいはユズの栽培をするかぐらいしか、地元にはありません。移住者の方は、それらのうちのどれかには入ってます。それで、コミュニティのほうは、物部町は従前から移住者は受け入れておりました。昭和三十年台ぐらいは木炭の製造ですね、その時期燃料は木炭でしたから、私らの同級生の子が居ましたけど、仁淀川町辺りから多くの方が移住してきて、地域へ溶け込んで、地域の住民になっておりました。それが燃料が石油に代わって、その方達は転出してきました。

それがまあ第1期でしょう。第2期が昭和50年頃、農業をするということで京都のほうから若い方が沢山見えましてやられたんですけども、なかなか夢と現実とは厳しいところがありまして、10人もはいなかったんですけど残った人は1人だけです。その人は農業を止めて、建設業のほうへ仕事を転職しまして残ってます。それが今の物部の消防団の方面隊長もやってくれてる方です。

そういったことで、移住者の方が来られても、一緒にやっていく環境は物部にはあると思うんです。ただなかなか移住者も定着しないし、定着してる人を見ると、やっぱりリタイヤ組とか、そういう人が残っているような現状です。なかなかリタイヤ組でもいいんですけども、なかなか地元では人材がいないので、やっぱり外から来た人になんか力を借りたりしないと、なかなか活性化というのは難しいんじゃないかというのが意見です。

1つは、集落活動センターにつきまして、検討し始めて5年になるんですね。結局まだ準備会のままなんです。今度何か8日に何かイベントをするんですけども、やっぱりリーダーがいない。リーダーというのはやっぱり、人がついていくような人じゃないといけなせんので、誰でもというわけにはいかないので、相当難しいところがあります。或いはその、教育関係で言いますと、地域学校協働本部というものもありまして、委員は60人程おるんです、それで作業なんかには積極的に協力してくれるんですけども、丁度役員が代替わりをしましたんですけども、やっぱり私から見ると会議の取りまとめが出来ないとか、やっぱり人材不足やなというような気がしてます。そういうことでなかなか厳しいところがあるのが現状です。

前後しますけど、移住を考えた場合に、教育環境というのが大事で、保・小・中はやっぱかならずあるのが必須やと思うんです。保育園も無いところに移

住者は来ませんのでね、移住やったら保育園のあるところへ来る、保育園のあるところへ来て香美市内へ行ったら小学校もそこへ行くというのは当然になってきますので、やっぱり今度保育園が、診療所の先生が転出されるんで4名になるんですけれども、やっぱり保育園は残してほしいなと思います。

また小学校も上海に帰るので1名減になります。18人になるのかな、19人が、そういうような現状がありまして、教育委員会が何故この活性化の取り組みを始めたかと言うと、やっぱり児童の減少というのが根幹にあると思いますので、それを考えた場合にはやっぱり、地域のそういったいろんな環境についてのあれをしていかないと、厳しいなというところがあります。

それともう1つ個人的に、空き家バンクなんかに登録する際に、うちも隣が空き家なんですけど、結局家財道具なんかを置いてあるんですね。ですから、家財道具を撤去する分についての補助なんかを知れだしたら、もっと空き家バンクに登録するところが出来ると思います。予算も沢山要るかもしれませんが、まあそんな気がしてます。

お願いばかりになりましたけども、さっき神池の話出ましたけど、結局神池も高齢化が進みまして、かかしも終わりました。10年はやるということで、世話役の方も高齢になり、現在は病気にもなってますけども、なかなかその、いろいろ始めても、継続が出来るのかということも心配の種なんです。

地域で子ども達の声がし、姿を見るっていうことも、本当に住民の人は元気になります。学校が無くても寂れていきゆうけど、学校が無かったらまだ寂れてしまうということで、心配を住民の人がしています。

割と自治会長さんなんかは、関心が無いとは言われんけど、まあしょうがないというような風潮があります。なかなかちょっと教育委員会が説明に行っても、なかなかうまくいかんところも、賛同が得られないところもあると思います。しかし、こういう発端が出来ましてので何とかですね、市でも検討いただいて、予算措置も要るかもしれませんが、少しでも活性化っていうか、維持っていうんですかね、もう最悪でも維持が出来るような方策をお願いしたいと思います。

西委員

私自身はそれこそ繁藤に住んでいて、若藤保育園が休園になる時に子どもが通っていてそういう状況、その後繁藤小学校が休校という形になって、児童数が減っていくと、おじいちゃん、おばあちゃんだったら当然残して欲しいっていうふうには思うんですけど、親としたら、やっぱりある程度の人数の中に子どもを置きたいっていう思いのほうが強くなってくるんですよ。勿論少人数で過ごすっていうのも凄く大事なことでなんだけれども、ある程度の集団の中に子どもを置きたいっていう思いのほうが強くなってきて、少人数で若藤保育園を残すことも出来たけど、やっぱり沢山の中に入れたらと思うと、新改への統

合みたい形になっていったので、保護者の気持ちもうそっちへ傾く前に、ある程度の児童数を確保、保育園児とかを確保していかないと、多分人口も流出してしまう可能性のほうが高いので、園児・児童数の確保を早くするのは凄く必要だと思います。

それがまた私が思うには、一時的に増えることはあるかもしれないですけど、一時的に2、3年とか増えても、またその後減少に転じていくっていうことになると、そのいろんな施設に手を入れて、税金使って投入したにも関わらず、5年後ぐらいにはまた減少に転じていくってなると、ちょっとどうなのかなって思うので、継続してある程度の人数がいられるような政策を打っていかないと、なかなかこう長い目で見た時には大変なのかなというふうに思いますね。それこそ本当に若藤保育園も凄いお金をかけて、凄い立派な園舎も建てていただいたのに、使用したのは本当にごく僅か、何年間で、もう今は草ぼうぼうとかになっていて、もったいないなと思って、それだったら最初からもう統合で、建てないほうが良かったんじゃないかっていうぐらいに思ってしまったんですね、地元にながらなので、そういう、ちょっと先をも見据えた政策っていうのが必要なのかなというふうに私は感じています。

依光市長

自分のほうからもまとめてですけど、まあ考え方としたら、もし物部村として存続してたらどういった政策を打ったんだろうかっていう考え方をしていて、もしそうであれば、多分いろいろな子育て支援のところにも他にも投入してただろうし、例えばいろいろな補助制度を付けて確保したというふうに思います。だから、頭の中ではそういうような形で、香美市というところではあるけれど、例えば大川村がどのようなことをやってるのかとか、そういう小さい自治体もやってるところも見ながら。ちょっと差をつけるような形もせんといかんのかなと。さっき言われたとおり公共施設の管理というところで、やっぱり今例えば、もう皆さん方のほうがお詳しいと思いますけど、例えば楠目小学校が多くなったと。だからそこに対して増築をせんといかんっていう話がある一方で、片方はもうほんとに空き教室が一杯あるという。そのバランスが悪くなっているところも思うので、まあ将来を見据えてって言った時に、やっぱりその、宮地委員が一番最初言われた時にメリハリを付けてみたいところもあるわけではなくて、香美市の集落を残しながら香美市の魅力を維持していく。その中で議会ともご相談をしながら、大栃に住んだらまあ生活が楽やとか例えば、通勤はしんどいけど、子育てするにはいろんな意味で市の補助金があるとか。だからどこまでそこが、公平のルールで出来るかというのもちょっとありますが、まあどこまで踏み込めるかですが、ちょっとそういうところまで行かないと、なか

なか父兄からしてみると、物部に子どもを連れて一緒に住むっていうメリットはないのかな。そこは意識をしながら検討していきたいと思うので、繰り返しになりますけど、もし物部村が残っていたらどういうふうにしたかっていう頭の中で、そこは大事にしたいなと思ってます。

以上です。

川田総務課長 ちょっと時間もありますので、他に議題が沢山ありますので、構いませんでしょうか、次に。

それと、先ほど小松委員さんが言われた中で、家財道具の処分の話がありましたが、定住推進課のほうで一定補助も、限度額50万円で2分の1なんですけど、一定用意してるみたいですので、またちょっとPRが足りないようですので、またするように伝えておきます。一応ご報告させていただきます。

それでは、ちょっと時間の関係もありますので、議題1については以上ということにさせていただきます、2番目の議題のほうに移らせていただきたいと思います。

議題2、ICT教育についてです。説明のほうをお願いいたします。

大峯係長 ICT教育についてということで、私と李先生のほうから説明させていただきます。私のほうから先の説明は、教育委員会事務局のほうでGIGAスクールに限ったところですが、どういった整備をしていくかと、どういった課題があるかとを説明させていただきたいと思います。

学校現場のほうでは、学校に情報担当者としての先生がいらっしゃいますので、その情報担当者の方の会とか、その取り組みについては後で李先生のほうから説明させていただきます。

まずGIGAスクール事業についてですが、令和2年度に端末を整備する、必要な整備をするということで国からも補助がありまして、令和3年2月にChrome Bookを1,771台整備しているところです。それと同時に、SIMカード、家庭にインターネット環境が整っていない生徒への対応としてSIMカート等も準備したところです。校内ネットワーク工事につきましても、令和2年度末、令和3年3月末に完了をし、さらには元々学校のネットワークというのは、市教委のほうで集約して、それを県のほうのネットワークにつなげるみたいなことをやってましたが、GIGAスクールが始まるということでそれではちょっと足りないということで、ローカルブレイクアウトと言いまして、各学校毎でインターネットに接続するというような工事を令和3年に入ってからになりましたがこれも実施をしております。また、ハード面の整備については、令和3年度についても、資料に書いてあるような整備をしているところです。

使っているソフト面についても、端末の整備と併せまして、生徒さんが使える学習支援ドリル「ラインズeライブラリ」というのを全生徒が使えるようにします。セキュリティソフトについても、これも家庭への持ち帰りの際にもセキュリティを、まあフィルタリングの関係なんですけど担保するという事で、セキュリティソフト「ISGC」というのを端末整備した段階から導入をしております。授業支援ソフトについても「ロイロノート」というのを使っておりますし、中学校については、中学校もロイロノートを使ってたんですが、今年度からちょっと違う「ウィンバード」というのを使ってみようということで、こちらのほうを使っているところです。また県教育委員会が開発している「高知家まなびばこ」というのも使えるようにしています。また研修についてですが、教員対象としてはグーグル研修、これはChromeBookを導入したことによって、Googleがスタートアッププログラムということで無料でやってくれる研修がありまして、こちらについては令和2年度に県の教育委員会が主催で実施した研修がありましたが、令和3年度についても、市教委のほうからGoogleのほうに依頼をしてまして、また追加で研修も実施しまして、スタートアッププログラムについては、県教委が実施した研修も併せて、市内の学校教員50名程度が参加をしているところです。さらにそのスタートアッププログラムの進化版ということで「アドバンスプログラム」というのも申し込みをしまして、17名が参加しています。また、市独自の主催研修というところもNTTドコモ、これはタブレットを購入した業者になります、ここに業務委託をして年3回実施しております。あと検証委員会というのを立ち上げてまして、初回の会が令和3年12月に実施をしております。

裏面へ行っていただきまして、学校における活用については、ご覧のような内容で、これは令和3年度時点の内容ですので、また令和4年度になってまた内容もちょうと変わってきてるかと思います。課題については右のほうに記載しておりますが、以上のようなことがあります。なかなか多岐にわたっているいろいろな課題があるなと感じております。

次に移っていただきまして、令和4年度の主な取り組みについてちょっと説明をさせていただきます。

まず最初に書いてありますがのが情報教育研究会ということで、こちらが各学校におられる情報担当者の方の集まりで研究会です。こちらのほうは、李先生のほうから後で説明をさせていただきます。市主催研修については、教職員向けの研修ということで、今年はデジタルシチズンシップということで情報モラル教育関連の研修ですが、大体基礎編は8月24日にもう実施をしまして、応用編を11月1日に実施する予定です。また別途ICT管理者の研修を、多分これは1月、2月ぐらいになるかと思いますが、これも実施する予定です。検証委員会

については年2回以上実施を予定しておりまして、今年度1回目は7月12日に開催しております。最終は来年の2月にやる予定ですが、1回目の7月の会でもうちょっと回数やったほうがいいというところで、年内にもう1回ちょっとやりたいと考えてます。続きまして学校内ネットワークに係る協議及び調査実施ということで、ローカルブレイクアウトも実施したんですが、ちょっと大規模な学校を中心にネットワークがちょっと途切れたりする時があるという話で、ネットワーク構築業者として四国通建という業者があるんですが、そちらのほうにいろいろ相談をしてきてますんで、これもちょっと対応を、四国通建がもう協議をしまして対応策を実施したところなんです。その後の状況とかいうのをまたちょっと学校側のほうにも聞き取りをして、それを実施してから、何かネットワークで不調があるみたいな話は自分のところでは聞いてないので、また今後もちっと学校にも聞き取りをして、必要であればまた調査、対応を行うということをしていきたいと考えております。続いて学校情報セキュリティポリシーの改正、こちらのポリシー改正というのが、本来はGIGAスクールが始まった段階で情報セキュリティというの、ポリシー改正については文科省が資料も作ってますので、改正をしないといけないとか、まだそれはちょっと出来てなかったところなんです。もう既に市の電算室が関連している広島ITというところともう契約をしてますので、こちらのほうはもう年度内に改正をすることになります。続きましてGIGAスクール運用サポート業務ということで、こちらのほうはICT支援員の派遣及び市事業に対するアドバイザー業務の委託を実施することになってます。この9月14日にプロポーザルのプレゼンテーションの審査を行いまして、業者もちっとまだ契約は出来てないんですけど、9月中には契約の段取りをしまして、10月1日からちょっと動くような形でやりたいと思ってます。福島県の業者で、ICTにかなり詳しい業者で、そこにいろいろサポートも受けながら、今後の説明はしていきたいと考えております。

私からの説明は以上となります。

李指導主任

では私のほうから、GIGAスクール構想の実現に向けた、香美市内小中学校の取り組みについてお話をします。資料をご覧ください。

中央教育審議会答申の「令和の日本型学校教育」には、これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、ICTの活用は必要不可欠であり、ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現により、全ての子どもの可能性を引き出すことが明記されています。資料はこちらです。

香美市でも昨年度より、1人1台端末が整備されました。現場の先生方とともに試行錯誤しながら、日常的な活用を積み重ね、効果的な活用を目指して日々取り組んでいます。1人1台端末により、これまでの学びとこれからの学びが大きく

く変わりますが、全てをＩＣＴに置き換えるのではなく、これまでの実践とＩＣＴの最適な組み合わせ、アナログとデジタル両方の良さを取り入れたハイブリッド学習を行っています。

お手元の資料にも、これまでの取り組みを一部紹介させていただいておりますが、デジタルネイティブな子ども達はタブレットの操作に慣れるのも早くて、先生を置いていってしまう勢いで、どんどん新しい技術を身に付けていきます。一方で、機器の使い過ぎであったり、ネット上のトラブルなども見られます。デジタル社会を生きる子ども達には、児童生徒をルールで縛る生徒指導的な情報モラル教育ではなく、先ほどのお話しにもありましたが、デジタルシティズンシップ的な考え方、ＩＣＴのスキルを身に付けて積極的に活用して、自立的に考えてトラブルを防ぐという教育が必要となっていて、各校でも教材や学習方法を工夫して実践を行っています。

資料の下の方にありますが、各校から課題として、タブレットにつながるプリンターやヘッドセットの要望、ネットトラブルへの対応、教員のスキル、活用頻度の差等が挙げられていました。香美市立教育研究所のＩＣＴ支援員による授業実践や年度更新などのサポートは非常に有難いのですが、現時点でＩＣＴ支援員さんはお一人で、１０校となるとなかなか手が回らない部分もあり、各校から学校へのＩＣＴ支援員の配置を望む声も上がっております。

香美市内の小中学校１０校の情報教育担当の教員が所属する情報教育研究会では、昨年度のアナケート結果から集約した課題を基に協議をして、今年度は情報モラル教育とタブレットを活用した授業改善に重点を置いて取り組むこととなりました。ＩＣＴを活用した学習活動において、今後さらなる活用を進めていく上で、大型ディスプレイの設置やデジタル教科書の導入が必要になってくると考えられます。情報教育研究会、香美市立教育研究所と連携しながら、今後も取り組みを進めていきたいと考えております。

以上です。

川田総務課長

説明は以上ですか。

そしたら、説明が終わりましたので、皆さんご意見がありましたら順次お願いいたします。

浜田委員

２１年から全国一斉にタブレットを生徒に配布、という中で今の時点では、香美市の取り組みは、高知県の中では多分進んだほうだと思います。ただ全国を見ると、まだまだかなという部分があって、一番心配してるのは、自治体間の格差が凄いい、今まで以上に、アナログの時以上に開いてくるんじゃないかと思ってます。まちづくりに活用する自治体は、例えば、福祉なんかでいろんな子育て制度

の充実など、若い世代、子どもを持った世代に魅力的に映る制度の活用やっただけですけど、今度は教育の場面で多分、こういうデジタル化が進んだ自治体が魅力的に映ってくる場合が出てくると思うんです。

例えば、今はこのタブレットをどう活用して授業にやろうかという時代です。実際もう県外の自治体では、企業と連携して、文科省の個別最適化の授業をもう取り入れて、それを自治体が無料で入れてやっています。だから先生がいなくても、そういう空いた時間で勉強が出来るわけですね。今までは多分、我々の時代は読み書きそろばんで、分からんことは親などに聞きよったんですけど、今の時代は、探究とか個別最適化とかいろんなことがあって、まあデジタルもそうですけど、親がなかなか子ども達に、今、学校でやっていることを教えることが難しくなっている時代です。益々こういうアプリと言うか、そういうものに頼っていく時代になってくるんじゃないかなと思うんですね。

例えば、そしたら塾があるやないか言うけど、塾は今まではどっちか言うと、読み書きそろばんの延長で、受験戦争的な部分でやり方の手法を教える。学校の授業とはちょっと違う。デジタル化をすることによって、学校の授業に合わせたアプリと言うかそういうものを開発して、企業が儲ける時代。進んだ自治体はそのようなアプリを活用して学習を補完する。だから多分この5年で自治体間の差が相当出てくるんじゃないかなと、非常にスピードは速いですから、従来より、非常に心配をする。まあ予算がかかることなので、自治体に体力があるところは、多分どんどん入れてくると思うんですけどね。

さっきの物部村の話やないけども、子どもを連れて若い層を移住から入れるという方法なんかに、そういうことがないとなかなか難しい時代になっています。だから、今はこの数年は研究でいいんですけど、そういう部分を含めて、授業の研究は当然、学校現場でやっていかないかんけども、まちづくりの一貫として子ども達をどう育てていくかという部分においても、市長がデジタル化ということを言われてましたけども、子育てもデジタル化のもう時代になっているということを少し、みんなで協議する必要があるんじゃないかなと思っています。

川田総務課長 この場でご意見あったら、先に。

宮地委員 読み書きそろばんのアナログなんですけど私、半分ぐらいしか分からないんですよ、実際。ですから、自分が各学校を回って感じたことは、やっぱり学校間に格差が少し生じているんじゃないかと、いわゆる活用についてですね。ですから、そういったことを無くしていく為には、やはり実際専門的な支援をしていただく方がいないとなかなか難しいと思います。ですから今説明がありましたように、その支援をしていただく支援員さんが、1人しかいないという現状です

ので、やはり人をなんとかやっぱり増やしていく必要があるんじゃないかというふうに思っておりますが。さあ果たしてこの田舎ですので、そういう人材が確保出来るかどうかって、これ課題になってくるんじゃないか。他のこともそうなんです、田舎の場合は人がなかなかいないという、ちょっとこれと話変わるんですが、今後部活動の在り方も今国から提言なされて検討していかなくちゃならない。そうした時に、結局は予算は何とかなるとしても、人材っていうものをどういうふうに確保していくのか、これがGIGAスクールだけでなく全てのことに関わってくると思いますので、そういった人材を何とか発掘して、活用出来るようなことが必要じゃないか。しかも、いろいろこう聞いてみると、結構田舎は田舎でも、東京の人から人材に来ていただいて、そこで、例えば市役所の職員に雇ったりしたりして活用している例も多々目にしたり耳にしたりするんですけども、何かその辺、田舎だからこそもっともっと知恵を出して、活性化するためにはその人材を確保していく必要があるんじゃないかと思っておりますが、痛切にアナログ人間ですけれども、それを感じております。結局、アナログ人間って誰かにこう教えてもらわないと、次行けませんのでね。まあいろいろとパソコンなんか使っても、動かなくなったら直ぐもう電源切ったりしてしまうような状況がありますのでね、だからそれじゃ困るわけですね、だからそういう、人を何とか増やすっていうことを考えております。

川田総務課長 ありがとうございます。その他もしありましたら、構いませんか。

西委員 ほんとに子どものほうが多分勝手につついて、どんどん技術も習得していき、うちも子どもにいろいろ、スマホに関してもこれどうなっちゃうがやろうとか、もう頭の中の想像とかでは理解出来ない状況ぐらいに私とかもなっていて、でもこれから生きていく子ども達はそれが当たり前、会社に入ったらパソコン使えなかったら仕事が無いよ、ぐらいの時代を生きていく子ども達だと思うので、やっぱりそういう技術っていうのは身に付けておくべきだとは私も思うんですけど、もう親世代が子どもに教えるっていうのは絶対無理なことではあると思うので、専門家の方からきっちりしたそういう技術だったり、ネットを使う上でのマナー的なこととかも一緒に同時に習得していく必要あるだろうなというのはすごく思いました。

川田総務課長 他にご意見は構いませんか。

依光市長 自分のほうからじゃあコメントを。

まあ時代がデジタル化というところでもう急激に進んだ、だからGIGAスクール構想っていうのも最初は何だったっていうところから県議会におった時から見せてもらってて、まあ一気に国が進めてきた中で、香美市は1人1台タブレットということで、自分自身はかなり進んでいるというふうに思ってます。その中でやっぱり、学校間にも格差があるっていうこともそうなんでしょうけども、方向性として、何でやるのかっていうところはやっぱりしっかり押さえておいたほうが良くって、まあ時代の流れ的に行くと、これから日本の人口も減っていきますと、その中で機械が出来るところ、コンピュータが出来るところはもう全部そっちに任せて、人間はやっぱり一定創造的なところ、人間しか出来ないところをやっていきましょう、だからまあそういう意味で行くと、やっぱりその機械に使われてはいけけないので、何のために使っているかっていうところは意識をしながら、だからそういう意味でいくと、昔はもうほんとに記憶だけ、暗記だけで勉強してたのが、今は考える力をいかにつけるかとか、そっちに変わってきてるっていうところなので、まあそういう子ども達をどう育てるかっていうところだと思います。

まあある意味、勉強は塾に行けばいいんだと、全部パソコンでやれば学校へ行かなくてもいいんだという世界もあるんだと思うんですけど、けどそれじゃあやっぱり社会に出て行けないと思うので、やっぱりその学校という集団があって、そこでいろいろと、人との接し方、或いは何かこうチャレンジしていくような、何かみんなと一緒に1つのことを達成することであったりとか。だからそういう意味で言ったら学校っていうところが、本来の人間とは何かみたいな、そういう哲学的なところも教えるんだと思うので。だからICT教育をやればやるほど、なんか1つ目は今エコとかやってますけど、例えばお茶、日本文化を学ぶとか、そういったところも一緒にやりながら、じゃあ何で日本人はこういうお茶の文化が育っていったのかとか。売りとしてはパソコンが使えるだけの人材育成を香美市はするんじゃないかって、何かそういう伝統とうまくやりながら、だからアートの部分であるとか、なんか機械って何でも出来そうですけど、できないこともありますよね。だからそういう意味で言うたら、香美市は文学とか、今度図書館も出来ますけども、何かそういうところも含めた教育になったらいいなというふうに思います。

それと、もう1つはITスキルのところでいくと、今支援員さんが1人しかいなくて苦労してると。この間山田小学校に行った時に、人数が多い学校で年次更新っていう作業に物凄い人が取られてるということなんですけど、ある意味考え方を変えて、父兄も含めて地域が一緒になって、なんかそういうところはサポートしましょうみたいな形のことが出来てもいいのかなっていうのを思っていて。それが何かと言うと、香美市も今コロナ対策の中で電子マネーとかやってる

んですよ。k a m i c a っていうのをやっているんですけど、使っている人は滅茶苦茶使ってるんですけど、使っていない人は全く使っていない。言ったら、いろいろと差が、住民の間でも差が出きているので、どっかの時点で住民の方々にも k a m i c a は使えるようになってもらいたいし、マイナンバーカードも本来自分でこういういろいろ出来るんですけど、スマホが使えないということで、市役所も今凄く大変な状況になってるんで。何かそういうのも含めて、何か I T の支援っていうのは、学校現場もそうですし、住民の部分でも、何か町として作れたら、まあ学校だけの支援員というよりは香美市住民の為の。そうすると、もしかしたら子ども達のほうが先生役になって、ある意味 I T 指導員の補助を子ども達がやるみたいなことがあるのかもしれないので、何かそういう、子ども達にも何か戦力になってもらう考え方も 1 つあるかな。だから、ある意味その学校が全部お膳立てをしてっていう時代ではだんだん無くなってきてて、子ども達のチャレンジを応援するような形に変わってきてるかなあというふうに思うので、それは多分、昔の教室において、授業もひたすら先生が言うことを聞いてノートに写してっていうところから、まあ何かちょっと変わってきてるのかなというふうに思うので、香美市なりの教育の在り方っていうのを考えていかんといかん時代なのかなあというふうに思ってます。

それと、あとは自分は不登校対策っていうところに凄く思いを持ってるんですけど、やっぱり学校に馴染めない子に関しては、学びを止めないっていう意味で行くと、凄く I C T が威力を発揮してるなあっていうふうには思ってます。一定自宅から、教室には入れんけど自宅で授業を聞けるっていう子どもの為には役に立ってると思うので。まあ方向性として、I C T の流れはしっかり進めていきたいなと思ってるけど、まあ機械に使われるんじゃないくて、まあ言ったように学校の集団の良さも含めた在り方を模索しながら。やっぱり、一番最初に言われた両方、アート志向みたいなのが、もしかしたら想像性とか、行動力とかリーダーシップとか、そういうのを何か学べるような I C T 教育っていう在り方で良い何かモデルが有れば、そういう研究をしてみたいと思います。

浜田委員

全然話飛ぶんですけど、言われてたことは、結果的に東洋医学的な面が必要だということ。昨日か一昨日かの新聞に、産業僧って載ってたと思うんだけど、まあ同じ答えやと思います。西洋医学と東洋医学的に考えると、デジタル化は西洋的な考え、論理的な思考であるが、それに比して、東洋的と言うか日本的と言うか、正解がないけど、時間をかけて問答を繰り返して、物事を整理しながら深く考えていく。

実際、国語の授業は、デジタルで読むよりは紙で読んだほうが多分成績は上がるという結果がある。今年の結果しか出てないとは思んですけど、空間を読む

ということなのか、そういういろんな考えを、俯瞰したり想像したりできる、東洋的なことに通ずるんだと思いますね。だから両方必要ということは事実だと思っています。けれども、まあ避けては通れない問題でもあることも事実、進んだほうがやっぱり住民生活の中で便利さを感じてしまうし、子ども達も便利さを感じてしまう。暮らしやすいという1つの仕様として、デジタル化はどうしても、自治体には必要になってくるんだろうなと思います。

依光市長 まあ工科大学があるというのは強みなので、何かそういう部分でも今、この間も工科大の皆さんともお話をしたところなので、住民もしっかりICT、自分自身がまだガラケー使っているので、まあそういう性格なんですけど、何か便利なものは利用したらいいんですけど、工科大学も是非一緒に。

浜田委員 自分もまあ、工科大とちょっと間隔を置いているんですけど、今日の新聞かな、高校に一応情報1という授業があるので、工科大と県教委がやると、これはどっちか言うと授業の専門性ですけど、教員が居なくても、学校の学生たちを市長が学長と話をして、バイトやないけども一定の人数を確保して、やっていくというもの手かもしれんですね。

依光市長 そうですね。

川田総務課長 他にご意見等ありませんか。今までの発言等をお聞きになって。
それでは、ご意見をいろいろいただきましたので、次の3番目の議題のほうに移りたいと思います。議題3は学校紹介についてとなっております。
それでは、説明のほうをお願いいたします。

明石主監 資料といたしましてはこのA4版の全国学力・学習定着状況調査について、矢印になって、裏にこういったものがあります。それから、香美市よってたかって教育という冊子になったものですね、それと1枚物の裏表になっております、この折れ線グラフと各県の、それを発表させていただいて私のほうからまず説明をさせていただきます。そしてその中で不登校のことにつきまして、先ほどお話もありましたけれども、宗石のほうからご説明をさせていただきたいと思っております。それではよろしく願いいたします。

まず、この香美市よってたかって教育、綴じてあるものをご覧いただけたらと思います。これは以前にもお配りをさせていただいておりますので、目を通されていることかと思いますが、本当に香美市の学校教育の現状について、本当に概要と言いますか、形になりますけれども簡単に紹介をさせていただいた

いと思っております。

香美市は、学校教育では基本理念として、郷土を愛し、未来を拓くひとづくり、学び、つながり、未来を拓くということで、左側のページにありますように探究あふれる保・小・中・高・大、そして特別支援学校が全部揃った学園都市、香美市として、探究という合言葉に、生涯教育を通した一貫性のあるスタイルで研究を進めていると言いますか、教育を行っていきたいと考えております。香美市が目指す、よってたかって教育というのは、学校、地域、保護者、そういった方々が皆さん寄り添って、これから訪れるであろう、右側にあります本当に予測不能な社会、この社会にこれからの子ども達をどう導いていくかっていうことをテーマに、今求められる力としまして、2段目にあります学ぶ力、つながる力、未来を創造する力、このことを求めて、今後令和の日本型教育に向けて進めているところです。現状で言いますと小中10校で1,578名、これは5月1日現在ですけれども、児童生徒がこの10校で学んでおります。

先ほども話題になっておりました大栃小中のことを特化して言いますと、平成24年、今から10年前には香美市では1,690名、約112名、6.6%の減少になると思いますが、大栃小は平成24年度には52名でした。ですが、本年度は19名、63.4%の減少になっているのではないかと。中学校で言いますと10年前は31名、それから現在は24名、済みません、これは手元の資料で申し訳ありません、口頭ですけれども、そういった形で大栃小に関しましては、非常にこう自然体から比べますと、やはり減少率が大きいというふうになっております。因みにこれは、私もこの大栃小学校ではお世話になりましたのであれですが、25年前には約180名、今の大宮小学校ぐらいの人数が、生徒さんがいらっしやったと思います。宮地先生が教鞭をとられた別府小学校は、50年前にはそれぐらい、今の大宮小学校ぐらいの生徒さんがいらっしやったと聞いておりますので、25年おきにどんどんどん人数が少なくなっており、今後25年経ったらどうなるだろうということを危惧しております。

まあそういった本当に予測不可能な時代に向けて、子ども達は今教育を行っているわけですが、香美市としまして、よってたかって教育を実現するための3つのポイントとしまして、その下に3つのことを挙げさせていただいております。ポイント1としましては、「育ち」と「学び」をつなぐ小中一貫教育、そしてポイント2としましては、地域とともにある学校づくり、コミュニティスクールというお言葉を聞いたことがあろうかと思いますが、そういったことで地域と共にある学校を目指しております。そしてポイント3としまして、子どもの「なりたい!」を後押しするキャリア教育の充実ということで、香美市内にも多様な子ども達がいらっしやいますけれども、先ほどのお話しにもありましたICTを活用して、これからは個別最適な学習と協働的な学びを一体的に充実

するように、香美市としては今取り組んでいるところでございます。

それでは、今から各中学校区について、本当に簡単に説明をさせていただきたいと思っております。まずは鏡野中学校区でございます。

鏡野中学校区は、表にありますA4版のそれぞれの中学校区が協議して決めた小中一貫教育グランドデザインというものを基に、小学校5校が力を合わせて、9年間の学びを継続的な学びにしようと今取り組んでいるところでございます。

まずは舟入小学校でございますが、舟入小学校は今まで道德教育を中心に香美市の基幹校として研究を進めてまいりましたが、昨年度から県のほうの学校教育安全プログラムというものの指定を受けておりまして、昨年度は生活安全、今年度は交通安全を基にこの研究を進めております。学校安全というものは、もう1つ災害安全というものがありますけれども、この3つが非常に大事となっておりますので、香美市ではこの基幹校を中心に市全体にこの学びを広げていこうと考えております。

続きまして、本当に簡単にさせていただきますが山田小学校でございます。

山田小学校は、もう本当に、先日学校に来ていただきましたので、もう本当簡単ですけれども、ここにありますようなGIGAスクール構想を活用しました、主体的に子ども達が学ぶ取り組みを、本当にチーム学校で取り組んでいる学校でございます。研究としましては、言語活動、情報活用能力を育てる研究として、主に国語科を中心に研究を進めております。チーム学校としまして、非常に働き方改革であったり、教育研究という部分で本当に、香美市の基幹校としての役割を担っている学校でございます。

続きましてページ13、14に移りますが楠目小学校でございます。

先ほど市長さんのお話しにもありましたように、香美市内の学校の中では非常に子ども達が増えている学校の1つでございます。本年度も校舎の増築とかそういったものが計画されておりまして、今後、本当に一定数がギリギリの数なんです、36名になれば2クラスになるんですけれども、それが34名であったりとか、そういうことで本当にこう、校舎が今後どうなるのかなあというところを私達もひやひやしながらしているところがあるんですけれども、とりあえずまあ増築をしていただいて、環境を整えていただいておりますことに本当感謝申し上げます。この学校は言葉を通してつながりを楽しむ子ども達ということで、先ほど山田小学校もありましたが、ここも国語教育を中心に研究を進めており、ここにありますような様々な自然体験学習を通して、総合的な学習にあります、そして香美市が進めておる探究的な学習も今進めているところでございます。

続きまして、片地小学校に移らせていただきたいと思います。

片地小学校は、県下の理科教育のリーダーとなるコア・サイエンス・ティーチ

ヤー、C S Tと言いますが、その教員が配置された拠点校で、香美市における理科教育の中心校となっております。ここでは特に理科教育というものを通して探究心を養うということで取り組み、後で出てきます全国学力学習状況調査、学力の面においても、非常に高い数値を例年示している学校です。そして何を言っても、左側にあります児童学校満足度という学校評価で、5年連続で100%を達成している学校で、それにはやはり、この中段にもあります片地の子どもを育てる会、地域、C Sの力も大きくこれを支えてくれているのではないかなと思います。本当にここに写真もありますが、地域の方々と力を併せて、本当にいろいろな体験学習をしており、それを支えているのが地域のC Sの力ではないかなと感じております。

続きまして香長小学校であります。

香長小学校は、右上にありますように本当に素晴らしい自然環境に恵まれた学校で、ここでは環境学習を主に研究の1つとして取り組んでおります。教科で言いますと算数の学習を例年、大学の講師をお招きして学校全体で取り組み、その成果が徐々に表れている学校でございます。そしてまた、6月に学校訪問もしていただいたように新改保育園を隣接しておりますので、保育園と小学校の連携も非常に昔から盛んに行われている学校であります。

続いて鏡野中学校でございますが、鏡野中学校は本当に先日見ていただいたように、本当に最近では落ち着いた学習が行われており、様々な活動でその成果が表れてきております。後で学習状況についてもご報告させていただきますけれども、この成果がそこに表れているのではないかなと思っております。

続いて香北中学校区に移らせていただきます。ページは22ページからになります。

香北中学校区は、この見開きにあります小中一貫教育グランドデザインにありますように、ここは国際バカロレア教育で繋ぐ9年間の学びということで、小中が一貫をしまして継続した学びを今も行っているところです。ご承知のように、大宮小学校は令和2年2月にPYPの認定校となりました。そして、その研究を引き継ぐ為に香北中学校がMYPの認定に向けて今年度、来月の10月に確認訪問を受ける予定となっており、スムーズに行きますと本年途中にこのMYPの認定を受けるということになっております。そしてまた、大宮小学校に戻りますが、大宮小学校は全国小学校英語教育実践研究大会の研究校としまして、他にも何校かございますけれども、発表校としまして来年度2月に全国から多数の教員の方々をお招きして、発表会を催す予定になっております。

そして、次に大柵中学校区になりますけれども、大柵中学校区はページ30にありますように、ここは保・小・中一貫教育ということで、大柵保育園とも力を合わせて、15年間の学びを一貫した取り組みとして、共に研究を進めている学

校でございます。見開きにありますように、今度の10月2日に運動会も保・小・中が一緒になって、地域の方も一緒に沢山参加をされますけれども、一緒になって運動会を開催することになっており、保・小・中それぞれが物部未来学ということで、異学年が交流し合いながら、様々な地域の特性を活かして、この地域の環境も活かした上で研究を進めております。ICT教育であったり、ここに紹介をされている部分で言いますと、遠隔授業であったり、それから高知工科大学との連携、そして他の市町村、先日は北川村であったり、ゆずサミットも行われたと聞いておりますし、それから韓国との学校とも遠隔で授業を交流したりということで、とにかくいろんなものに挑戦して、それぞれの学びを深めて、そして、香美市の中心は大栃にあるという言葉で、この地域的なものを逆手に取って、高知県、そして世界に売り出していこうということで取り組んでいる学校でございます。

本当に簡単に各学校のことを説明をさせていただきました。そして、これから矢印の裏面を利用させていただきますと、先ほど説明をしました10校の今まで取り組んできた小中一貫教育に向けて取り組んできた結果、そして課題というものについてご説明をさせていただきたいなと思っております。

まず、そうしましたらこの1枚物のA4版の裏と表にあります、表面がこの折れ線グラフでございますが、こちらをご覧くださいいただければと思います。

これは平成23年度から本年度令和4年までの全国学力・学習定着状況調査の全国との差をこちらのグラフに表したものでございます。このA4版で言いますと、(2)の系統的な学習という部分を少し折れ線グラフに変えて表したものですので、こちらをご覧くださいいただけたほうが見やすいかと思えます。

全国がここ0の部分になります。これで見ますと、平成23年、丁度全国・学力・学習定着状況調査が始まった年は、小学校は全国よりも上、そして中学校は、ここにあります数学なんかはマイナス11ポイントというふうに、非常に離れた部分で苦戦をしておりましたけれども、これを研究することによりまして、ここにありますように大体右肩上がりで、小学校は全国よりも上と言いますかプラス3ポイント以上のものもありましたけれども、そういったものを示した結果になっております。中学校はまだまだ全国より低いものもございすけれども、全体的に言いますと右肩上がりで推移しております。近年で言いますと、中学校が右肩上がり、ただ小学校のほうが若干伸び悩んでいるというのがここ近年の特徴でございます。

これをもう少し分かりやすくと言いますか、全国に置き換えるとどの辺になるのかということで表したのが裏面にございます。裏面を見てくださいと、それぞれの県名が書かれていると思います。まあ余り、これ始まった当初は、こういうふうにして計上しておりましたが、最近はどういったデータは余り公に

は出ておりません、これは私達が独自に作ったもので、そして、以前は小数第1位まで出ておりましたのでもっと差がいろいろと、順位が付いていましたけれども、今はもう整数値の部分でしかデータが出ておりませんので、それを基に香美市の位置づけを表したものになっております。香美市を黄色で色付けしております。そして高知県をこの朱色と言いますかね、そういったもので表し、全国をグレーの色で表しているところです。

小学校の国、算に関しましては高知県よりもというところがございますけれども、まあほぼ中学校が先ほど全国より苦戦をしていると言いましたが、高知県の中で言うと、本当に頑張った成果が出ているのではないかと、中学校の国語、数学、理科に関しましても、全国と同じという部分が見えてくるのではないかなと思っております。済みません、ちょっと小学校の算数の平均値がここに載っておりませんね。ですので、全国同等、もしくはそれ以上の成果を香美市の平均値としては出しているのではないかと感じております。ただこれも学校によって差がございます。

こういった現状でございます。

続きまして、右側の(3)児童生徒理解の一貫性というところの、まあ不登校に関しましては後で違う資料を用いまして宗石のほうから説明をさせていただきますが、体力面で言いますと全国体力・運動能力調査というものがございます。これはA、B、C、D、Eの5段階で評価をするもので、D、Eが頑張っていないかなくてはいけないという部分になりますが、そのD、Eの割合をこちらに示したものでございます。見ていただければ分かると思いますが、青色が香美市、そしてこの折れ線グラフのほうが全国となっており、ちょっと近年では全国よりも香美市のほうがD、Eの割合が多い、つまり運動能力が言葉ではあれですが劣っているという部分になります。これは下にあります肥満度のほうとも関連付けて見ていく必要があろうかと思っておりますけれども、やはりこの部分でも課題が大きく、やはりこの運動能力、それから肥満度に関しましても言えることはと言いますと、やはり二極化が進んでいるということと、併せてここ近年のコロナ禍で、こういったものが顕著に現れている傾向もあります。やはり体力が落ちてきたというふうにおっしゃる校長先生もいらっしゃいますし、この表からも見てもそういった部分が見取れる部分がございます。

そして次の表の部分で言いますと、香美市が進めておりますキャリア教育という部分を一定図る数値としまして、中段左端にあります全国学力・学習状況調査の質問紙というものがございますが、その中から拾った数値の中で、地域や社会を良くするために何をすべきかを考えることがありますかという、これは強い肯定の部分を持った部分でございますが、香美市は全国と比べまして、この部分で言いますと本当に高い数値を示しておりまして、これまで取り組んでまい

りましたキャリア教育という部分が、こういった部分に表れているのではないかなと感じております。

それから、中段にあります埼玉学力・学習状況調査というものがありますが、これは香美市のほうが令和２年度から始めておる学力調査でございます。学力調査の部分で言いますと、個人の伸びを探っていくための調査でございますけれども、学力・学習状況調査の部分はこの学力の部分ではなくて、いわゆる主体的な学び、対話的な学び、深い学びといった学力を支える、そういったものを図る部分でございますが、例えば主体的な学びの１にはどういった質問があるかと言いますと、授業の初めに今日はどんな学習をするのか、把握してから学習に取り組んでいますかとかいう質問でございます。そういった質問が１０項目ありますけれども、大体この項目で言いますと全国並み、これを良しとするかということで考えていきますと、今後まだまだ深い学びと言いますか、授業で学んだことを日常生活に活かすとか、これから探究という部分で、どんどん自分で更に知りたい、この８番がちょうどそうなりますけど、授業を通して学んだ内容について更に詳しく知りたい、学びたいと思いますかという項目でございますけれども、そういった部分がやはりまだ、この全体的な部分で言いますと低くなっておりますので、更なる授業改善であったり、授業の工夫というものが必要になってくるのではないかなと思っております。

それから、右端にありますゲーム、インターネットというものでありますが、先ほどのＩＣＴのところでも出てはまいりましたが、これは平日に、ゲームが青でございます、そしてメールというものがだいたい色でございますが、２時間以上する子どもの割合を表したものです。これを見てどうでしょう、平日に２時間以上ですので、非常にこう高い割合を示しているのではないかな、特にゲーム、中学校３年生で５３．７％というものが出ております。まあこれは下の段にありますこととも関連はするのではないかと思います、家の人と約束を決めていますかということ、この部分が非常にまあ低いということでございます。ですので、こういったこと、いわゆる家庭の教育力の低下という部分も併せて、今後ＰＴＡとも協力しながら、この部分を何とか改善の方向に進めていかなくてはならないかなと考えております。

そうしましたら、私のほうからは以上とさせていただきます、不登校の現状について、宗石のほうから説明させていただきます。

宗石指導主任 こちらの３部の資料のほうを述べさせていただきますので、ご覧ください。令和４年度１学期の不登校の状況について説明をさせていただきます。

１枚目は各校の不登校の児童生徒数を表にしたものとなります。左から学校名、児童生徒数、そして１０日～１９日、２０日～２９日、３０日以上、それぞ

れの欠席した人数があります。青い蘭は新規者で、令和3年度まで30日以上
の欠席がなく、令和4年度に10日以上欠席のある児童生徒の数です。オレンジ
の蘭につきましては、新規の児童生徒も含めた不登校の児童生徒の数となつてお
ります。次の右側は、学年、それから男子、女子で不登校の児童生徒を示してお
ります。その次の病気、赤で②と、それから緑でその他とありますけれども、こ
の2つの点についてこれから説明を簡単にさせていただきますので、2枚目を
ご覧ください。

2枚目は令和4年度、病気、その他による長期欠席者状況を表にしております。
病気に関しましては①怪我・疾病と、赤で書いてます②心身の不調とありま
すけれども、今年度の県の不登校調査から、この病気の中に心身の不調というも
のが含まれることになりました。心身の不調と言いますのは、右側に赤字で書か
れているようなものになります。また緑のその他ですけれども、こちらも家庭の
放任や無理解が含まれることになりました。

済みません、前後しますけれどもまた1枚目のほうに戻っていただいてもよ
ろしいでしょうか。

1枚目、2枚目の男女で示しております児童生徒の欄に米印があると思いま
すけれども、そのお子さん達は要保護、準要保護のお子さん達になります。1枚
目の下の表に、小中それぞれの児童生徒の数、そのうちの要保護、準要保護の人
数を括弧で示しております。不登校の児童生徒では、55.2%、それから、そ
の他の児童生徒では69.2%となっていて、高い割合を示しています。各学校
では、欠席した児童生徒の家庭に電話をして体調を聞いたりですとか、家庭訪問
をしたりしながら、保護者とも連携を、連絡を密に取って児童生徒の様子を聞いて、
気になる子どもがいたら学校内で情報共有をしたりしておりますけれども、
家庭の中にはやはり保護者自身へのサポートというものが必要であったりとか、
家庭環境に支援が必要であったりというところがあるのも現状です。

ですので、今後福祉事務所などと今以上の情報共有をして、連携をしていける
ように、手立てが必要な子どもさんや保護者、家庭について協議を行う際には、
福祉事務所等の関係機関の方々にも参加をしてもらっております。

3枚目、A4版の資料のほうをご覧ください。令和4年度香美市小中学校の不
登校対策事業の中で、主な2校の取り組みについて説明をさせていただきます。

まず1枚目は山田小学校の不登校担当教員配置校サポート事業です。不登校
児童生徒の減少並びに未然防止の取り組みの充実を図るための事業となつてお
ります。未然防止の取り組みといたしまして下にありますように、魅力ある学校
づくり、校内研、気持ちメーターの活用などを行っております。次に、早期対応・
早期支援といたしまして、右に写真がありますけれども、朝の連絡カードで児童
の登校を確認後、職員室の大型ホワイトボードに欠席をしている児童名を記入

します。そして情報共有を行っております。また欠席している児童への電話連絡、家庭訪問、面談等で、児童や保護者の声を聞いて支援会等を行い、早期に手立てを行うようにしております。また登校しぶりの児童への初期対応記録の共有などの取り組みを行って、令和3年度は新規不登校児童数がゼロという成果を上げております。この山田小学校の取り組みにつきましては、9月1日の小中合同の校長会で山田小学校の植村校長先生から、実践内容について発表をしていただきました。今後の方向性として、児童主体の授業づくりを行う、長期休業明けに元気に登校出来る為の児童支援の徹底を行う。SC、SSWの方など専門機関との連携を強化ということを今後取り組んでいくようになっております。

2校目は鏡野中学校の不登校支援推進プロジェクト事業、鏡野中学校校内適応指導教室です。不登校の生徒への学習支援等や自立支援に向けた支援の強化を図るための事業となっております。令和4年度1学期の校内適応指導教室、名前はスマイルルームと言いますが、利用状況は下の表のようになっております。1学期の取り組みといたしまして、鏡野中学校にあります校内適応指導教室コーディネーターの先生が、校内の不登校の生徒の相談にのったり、各クラスの不登校の情報の集約を行って、生徒一人ひとりに応じた対応を行っております。また教育支援センターふれんどる一むとの密な連携から、登校増加の兆しが見られるようになってきております。今後の方向性として、不登校等生徒支援の組織体制を確立、それから、学校・学級復帰のプラットフォーム的な役割、不登校の未然防止及び初期対応の取り組み、最後にタブレット等のICTを活用を中心に今後取り組んでいくようになっております。

簡単ですが以上です。

明石主監 以上で説明を終わらせていただきます。

川田総務課長 ありがとうございます。それでは皆さんのご意見をお願いしたいと思います。

浜田委員 補足ですけど、先ほど学力の関係がありましたけど、ご存知のように中学校が凄く伸びてる、これは大変えらいなと思ってます。と言うのは、香美市の場合は比較的小学校が、最近伸び悩みみたいところもあるけども比較的高い。で高知市に近いので、高知県独特の私学へ、中学受験という、学力的に高い小学生が私学を受ける傾向があるので、中学校へ行くと高い学力の子が抜ける。他県では、高校受験が主だと思いますので、中学校はそのまま上がるんですけど。そういった意味で抜けた後も補足して全国よりも高いレベルに持っていくというのは、なかなか本当に中学校の先生は大変やと思う。実際小学校の問題が中学校の問題につながり、中学校の問題をたどれば小学校、不登校も何も全部そうなる

る、学力も体力も。だから小学校で何とか解決をしながら中学校へ持っていく、そのために連携を強化してるわけですので、その辺ちょっと支援する政策が必要と思っています。

川田総務課長 その他ご意見とかございますでしょうか。

宮地委員 私はちょっと不登校についてお話ししたいと思います。

この表にもありますように、いわゆる病気、あるいは心身の不調というふうな、それについては、まあ学校もかなり必要とされてやっていかんといかんわけですが、その他の分類を見た時にですね、ネグレクトとか、非常に親の責任の部分が放棄しているようなところが非常に多く見分けられます。ですから、例えば今香美市に博愛園がございますね、保護施設がですね、あそこに入所されてるお子さんなんかも、高知市からネグレクトとか虐待とか、そういったことで沢山子どもさんが入っておられる。しかも、いわゆる小学生の児童とか生徒じゃなくて、就学前の子どもさんも沢山入っておられる。その子どもさん達が土佐山田幼稚園のほうにまあ通われてるわけですが、保護者が当然果たすべき役割がきちっと行われてない、ここが一番の課題でして、これはむしろ学校の責任と言うよりは、全体で取り組んでいかなければならない問題であろうと思います。ですから、香美市の場合も教育研究所、或いは福祉事務所なんかとも連携して取り組んではいるんですけれども、更にもう一歩進んだ、対応が必要であろうというふうには私は思っています。

例えば具体的に言いますと、作業療法士ですかね、そういった専門職があるんですけれども、そういった方々にも参加をしていただいて、会で諮っていくような、いわゆる専門のスタッフもどうしても必要になってくるんじゃないだろうか。まあ、例えばS S Wと言って学校と家庭をつなぐような職員も配置はしてるんですが、でもそれは専門の方ではなくて、あくまで一般の方です、資格があるわけじゃないですから。そういった専門職の方も、やはり香美市としては積極的に導入して、総合的に子ども達を育てていく必要があるだろうと、そのことは先ほど市長もおっしゃっておられましたけれど、不登校の改善ということが我々の最課題ですので、そういったことまで少しウイングを広げていくべき時にもう来てるんじゃないかなというふうには思います。

川田総務課長 そのほかご意見等ありますか。

依光市長 私から、不登校対策ということはまあ一番自分も関心が高くて、学校の成績というところでいくと、かなり先生方が頑張られてるところなので、そこに

対して、言われるように家庭から来るものというのは、やっぱり学校に任せていてはいかと自分自身も思ってまして。こども家庭庁っていうのが出来る時に議論に関わってたんです。自民党のほうから出てきた中で、四国の取りまとめということで自分がやらせてもらって、高知県の児童相談所の事例とかいろいろ含めて話をしてました。やっぱりコロナとかもあって、急に親御さんの状況も悪くなったみたいなこともあったりして、そういうところは児童虐待とか、そういう部分から福祉部門とやっぱり教育がしっかり連携をせんといかんというところで、来年度からちょっと、昨日も組織の話をしてたんですけど、こども家庭庁に併せた形で福祉部門、あるいは健康介護支援課の部分っていうのを連携をし、また今健康介護支援課ということで子どもと高齢者があるんですけど、子どものところにやっぱり力を入れようというふうに思ってます。

それと、いろいろとスマイルルームを見せていただいて、先生方頑張っていたいて、子どもさんとかもそこで勉強してると。なかなかいい良い取り組みであると思って、県の指定が終わると人を減らさんといかんというところなので、そこはまあフォローせんといかんかなというふうに思ってます。

それと、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの部分も早目早目のところで、山田高校にも話を聞くと。結局中学校の後に山田高校に行って、山田高校としてスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーというところに関わっていかうとしているけれど、なかなかその部分の体制が弱いということなんですけど、そもそもこれまで関わってきた方が専門職でいらっしゃるの、その方に同じ子をずっと見てもらったほうが多分状況も分かっているんじゃないかとも思ってて。そこが市と県のたてりの違いなんですけども、子どもさん達にとって一番いいカウンセラーを選んで、その方にちょっとやってもらうような仕組みが出来たらいいなと思ってます。そこはちょっと考えていきたいというふうに思います。

それともう1つ特性から来る部分で、発達障害とかを含めて、そういう方、子ども達にはやっぱり専門的にやり方を考えた方がいいということを思ってます。まあこれも、今度はアンパンマンミュージアムで医大の先生から言われて、目とか耳、光とか音に対して物凄く神経質な子どもさん達が、安心して見れるようなイベントをこのアンパンマンミュージアムでやろうかっていう話があって。この前、さとうみっていう土佐清水市の水族館でやったっていう事例があるんですけど、今度30日にアンパンマンミュージアムでそれをやろうとしています。だからそういう、なかなか、生まれつき音とか光とかに過敏な刺激を受けてるっていうのは、もう完全に専門職の話なので、さっき言われた作業療法士さんなどは、なんかそういう専門職の方と関わりながらということも考えていきたいと思っています。

これからこども家庭庁っていうところで、まあ自分も情報を取りながらどんな予算でやっていくのかとか、そういう国の予算も活用出来るのであれば、そういうことも活用しながらやっていきたいと思いますし、やっぱり早め早めの対応やと思いますから、親のことも含めて出来るだけ早い段階でつかんで、しっかりと、まあ引きこもりとかそういう世界も今はかなり社会問題にもなっているのです、やっぱり学校に通ってもらって、友達を作ってもらって、社会に出ても地域に助けられながらこう、行政的に言うたら納税者になってもらうというような形まで持っていきたいと思います。来年は必ず福祉部門を特に。ほんと大変やということを聞きました。

宮地委員

ありがとうございます。非常にありがたいお話を聞いて、気持ちがほんと凄く嬉しくなりました。やっぱりそういった総合的に取り組んでいかないとなかなか出来ない問題であります。それから、先ほど物部町のところでも言ってる、香美市は人が育ちやすいっていうことも凄く大事だと思いますし、若い方が移住されても、子育てや勉強がしやすいっていう、そういったところが物凄く売りになると思いますので、是非ともこども家庭庁の先取りをして、香美市のこれは何て言いますか、最先端に行くような、そういった取り組みって凄く嬉しいなと思いました。是非ともよろしくお願いします。

依光市長

ちょっと今思い出したところで行くと、大柝のほうで里親をやっている家庭があつて、そこの子どもさんが一定大柝小学校に通っていると。今博愛園さんの話も聞いたんであれなんですけど、施設型っていうよりは家庭型に移ろうをしていて、里親についても支援っていう話が国のほうからもかなりあります。要するに、単純に家庭を知らないんですよ。と言うのは博愛園にいたら、言うたら大人数の中なんですけど、例えば先生は夜になったら帰ってしまう。やっぱりそれは家庭ではないと。家庭やったらずっとお父さん、お母さんに当たる人がおつて、夜一緒に寝てくれて、例えば大人とお風呂に入る。だから施設にいと、なかなかそういう密なことも経験出来るので。だから博愛園も凄く一生懸命やっているんですけど、家庭を知らない。次の世代になった時に、どう育てないかんといいようなことが出てくるということで。だから香美市も里親っていうところも力を入れれる。そういうことも含めた地域のなんかサポートがありますよということも売りに出来るのであれば、そういうことも考えたいと思います。

川田総務課長

その他ご意見等ありませんか。

白川教育長

この不登校の課題もそうなんですけれども、大柝小中学校、特に大柝中学校の

もう1つの役割として、なかなか大規模の集団の中で学ぶということが出来にくいというお子さんについては、大栃中学校があります。ICTも取り入れながら、ハイブリットの授業も普通に出来ていますから、安心してこちらへ通って来て下さいという、位置づけの学校が香美市に1つあるということも、大切なことではないかというふうに考えております。規模が小さいことをむしろメリットにしてもらえる学校としての存在意味も大きいというふうに考えています。小学校のところまでは友達とかなどと遊びながら、なんとか6年間通ったけれども、中学校に上がって行くとちょっとまた思春期に入りますし、成長の過程はそれぞれ違ってくるという中で、1つの選択肢として、香美市には大栃中学校という、余り大きい規模では学びというものを自分の力で実現しづらい子どもさんには是非、そこで学んでいただくということもしていただける、そういう学校としての位置づけが必要かなというふうに考えております。

川田総務課長 その他ご意見構いませんか、いいですか。議題のほうは以上となりますけれども、その他のほうで何か準備されてるようですので、議題のほうは全て終了ということよろしいですか。

「はい」という声あり

川田総務課長 それでは、その他のほうに移りたいと思います。その他ということで、じゃあ教育長。

白川教育長 その他のところで、不登校、それから特別支援教育の対策充実というところも、非常に大きい課題になっております。負の連鎖を断ち切るということを積極的に行うことによって、香美市の活性化につなげていくということになってこようかと思っておりますので、西庁舎、いわゆる教育棟の移転につきまして、他課とも連携が取りやすく、お互いにじゃあ直ぐ動こうということで出掛けて行けるような環境の中で、これからも業務を推進していく必要性が高まってこようかと思っております。是非現在の場所において運営が出来れば良いと、考えておるところですけれども、その点についてはいかがでしょうか。

川田総務課長 ご意見どうぞ。

宮地委員 さっき今市長にも申し上げましたけど大賛成です。やはり1つの建物にそういった総合的に福祉の専門機関ですとか、あるいは家事相なんかもありますよ

ね。そういう機関がこう1つにあると、非常に便利かなと。例えば、ここの庁舎の中に相談機関があっても、なかなか住民としては行きにくいんですよね、ちょっとやっぱりこう、構えてしまってね、人目もあったりしてちょっとよう行かんという。だから、ちょっとこの本庁舎から外れたところに、そういった、いわゆる家庭支援機関ですとか、教育機関ですとか、そういったものがあると、総合的に子育て支援センター的なものがあるって、例えばそこが、今市長がおっしゃったようなこども家庭庁を先取りしたような、そこに香美市独自のそういった支援センターがあれば、これはかなり全国的に発信出来るし、それをやることによって、更に香美市に行って子育てしたい、住みたいっていう人も増えてくるんじゃないかというふうに思うわけです。だから、高齢者も大事ですけど、若い人が入ってくれんなかなか税収も無いですしね、それから町が栄えていきませんので、だから若い人が呼んでくるためにも、そういったものも必要なというふうに今思ったことです。

浜田委員

まあ、教育支援センター的なもので言うと、それとやっぱり専門職、専門の方に対しての研究というのは大変大事で、結果的に、教育委員会も当然人数が少ない中でやってますが、いつも残業ばかり。学校も、今先生になりたがらんばあ忙しくて、保護者からの対応とかいろんな部分で、なかなか課題に対して、どうしたらいいかという部分とか解決出来てない。香美市が結果的に、今一定の教育的な成果があるのは、やっぱり教育研究所でそれぞれの不登校とか、特別支援とか、新たに入ってくる英語教育とか、それとか情報とか、いろんなことに対して一定課題を持って対応して、それをフィードバックして学校へ下ろしたりいろいろしてるので、一定の成果があると思います。だからそれはもう総合的に全体を、子ども達を支える一つとして考えて、大学も一緒です、専門性がない大学はやっぱり減びていく。

だからそういう意味で研究の部分、支援の部分、総合的に考えていただければ大変ありがたいなと思います。

宮地委員

今浜田委員が言われたように、教育研究所が出ましたので、私もかつて教育研究所所長の経験がある者としてちょっと申し上げたいんですが、高知県にはかなり小さい町、市に研究所が沢山ある、これはもう全国には全く無いことなんです。それは、小さな自治体でも教育のレベルを上げて子ども達をしっかりと育てていこうという目的の下に作られているんですけど、その研究所がしっかり機能しているところと、残念ながら余り機能していないところが県内にあります。ですから、香美市なんかは機能しているところなんです、機能しているところっていろんな教育課題がどんどんどんどん解決に向かっている、学力についても

そうですし、不登校なんかについても、その教育研究所がしっかり根付いている、だからそういったことが凄く今大事ですので、やはりそういったものを含めたそういう総合的な施設ですよね、支援センターがあり、不登校対応があり、研究所があり、それから福祉の関係の大御所があつてというものがどうしても必要かなというふうに思います。

依光市長

まあ自分自身として、不登校対策であつたりとかＩＣＴ教育であつたりとか、そういう研究をしていただいているところで、かなり進んでいると思います。

今庁内のほうで議論を進めてもらってるので、何を目的にどういうふうにするのか。さっき言われた相談センターっていうふうにしていくと、組織としてどうするのかっていうのもあつて。今２階が丁度教育員委員会があつて、福祉事務所があつて、まあ割といい形にはなっているんだとは思ってるんですけども。こども庁の議論も含めながら、また庁内でどういう人員体制になるかっていうのに時間をかけて。まあ言われたように子ども政策もしっかり打ち出していきたいというふうには思っているんで、だから専門性を生かすというところでいくと、箱を作るというよりも人材配置のほうが大事やと思うので、どういうお金の使い方をしたほうが香美市の教育にとってえいのかというところも含めて。まあ不登校に関してはやっぱり、一定専門家が子どもに関われる時間を増やすというところが大事なんだろうなというのは感触としては持っています。

川田総務課長

その他ご意見、教育長、構んですか。

白川教育長

その不登校のことに関わって、考えないといけない課題が特別支援教育です。香美市内の子ども達で、特別に支援を必要とする児童生徒の数が増えてきております。

鏡野中学校では昨年度、今年度とも７学級です。中学校で７学級の特別支援学級がある学校となりますと、先生達がもうフルタイムで働いて、やっとその学校が運営していく。その中で誰一人休まず頑張って鏡野中はやってくださっているので、本当に頭が下がる思いですけれども、そういうところがあります。

山田小学校にしても、４学級、５学級というように子どもの数が増えております。併せて１学級７名の情緒障害を持つ子どもさんが、１年生から６年生までにわたっていて、それをお一人の先生が指導することについては、困難な状況もあります。

香美市では特別支援教育支援員という制度により、情緒に障害を持つ子どもさんの、個別の状況に合わせた指導を支援する職員の配置を行っています。また、時間割の編成も非常に複雑で、しかもマンパワーの要る学校経営というのが

現実のところでございます。

そこで、教育研究所で、特別支援教育に当たるために必要な心構えであるとか、指導のノウハウであるとか、そういったことも個別に学校へ出かけて行って指導しています。その中には、不登校の子ども達が出現してくる状況も見られますので、そういったところで福祉も入って、一体となった取り組みが益々求められていくというふうに思います。その点も教育研究所の役割としても重要なと思います。

依光市長

お話しがあったので。

まあ自分も特別支援教育っていうのは凄く、凄くと言うか、たまたま妻がそっち専門やったので、ちょっとずつ詳しくなったんですけど。高知県がスウェーデンのヨウテボリ大学というところでギルバーク先生っていう世界的な権威と連携したところからスタートしてるんですけど、まあそういう世界なんです。ほんでうちの妻から言わせたら、香美市は手厚いんだと。だから親御さんが香美市に通わせたいって言うから、やればやるほど、結局香美市は手厚いからって言って呼び込んでるところもあって。ここも悩ましいんですよ。だからもう覚悟を決めて、香美市は特別支援教育をしっかりとやるんだって、もうどうぞ来てくださいますまでやるのか、そこはねえ、だからやっぱり手厚いって言ってます、うちの妻自体が。やっぱり香美市は手厚いから、親御さんとかがやっぱり探しているんですよ。結局自分の子どもをしっかりと育てたいって思った時に学校を選んでもんですよ。だから、フリースクールとかいろんな学校を作ると、やっぱりそういう子ども達が集まってくるので、結構それはそれで大変やということも聞くし。だからまあ、悩む。そこを取り入れていくのも、どうぞ来てくださいますまでやるのか、そこはちょっと悩ましいんですけど、確かに言っていました、香美市は手厚い。

白川教育長

随分助けていただいています。

宮地委員

いや冗談抜きでですね、それこそ香美市と南国市とですね、香南市と3市で、特別支援学校を作らないかかねえっていう話もしたことがあるんですよ、だからもうそんな時代に来てるのかなと、今まで特別支援学校って言ったら、県立か或いは高知市ですよ、それしか無かったんですけど、今どこにも沢山増えてきましたからね。

そう、だから香美市だけじゃ学校とんでもないことですから、そうするとこの3市辺りで、100人規模の学校を作る必要があるかねえと思ってねえ、そんな時代になりましたね。

- 浜田委員 実際、幼稚園から保育園も含めてですけど大学まで、特別支援もある町ですから、ある意味教育の多様を受け入れる土壌はあると思うんよね。やっぱり一定この町へ来たら、子どもは安心なんだというぐらいの覚悟を持っていったほうがいい。
- 依光市長 そこまで腹を決めてないですけど。
- 浜田委員 他の市や香南市、南国市は県特別支援が無い。高知市は30万人都市なので、うちの10倍あるわけですから、そこは全部揃ってますけど、他は無いので、ある意味大事にする環境が、香美市にはあると言えます。
- 依光市長 そうですね、山田の特別支援学校ともちょっと話をしながら、まああそこもパンパンで、増やしたりしながら、分校作ったりとかやっているような状況であって、まあけど、ちょっといろいろ…
- 宮地委員 国の補助は3分の1ですかね、建物も。
- 秋月教育次長 そうです。
- 白川教育長 研究所のほうが大分その点を担ってもらってるところが大きくて。不登校のほうはもっと学校へ直接行って、ふれんどる一むもありますし出来るんですけども、その特別支援のほうもかなり重いウエイトで研究所が動いているという実態が実は見えないんですけれども、ほんと見えにくいんですけど、やっぱり香美市のように子どもに限らず人口が少ない町というのは、1人も無駄にしない教育、1人も無駄にしない行政っていうか、そういうことを目指していくことが大事なというふうには思います。口で言うのは簡単ですけども、その辺を市長さん、ご苦労を…
- 浜田委員 先生方大変ですけどね、我々は口で言ってるだけやから。
- 依光市長 まあとにかく重要性は十分分かってますし、また医大との連携とかもいろいろやっていきたいなと思って。そういう情報提供もしながら、専門性のある方に教えてもらおうと。結果、授業が楽になるとか、子どもの情緒が安定すると。もうてきめん負担も減ると思うので、そこはまた何かやっていきたいなと思います。

白川教育長

私達の精一杯出来ることとしては、二次被害を起こさないよう、本当に特別支援教育の専門性に頼ってご指導いただきながら、学校が対応しているところです。学校としては、教師の専門性を高め、個別最適な学びを如何に実現していくのか、そこに学校がこれから一生懸命力を注いでやっていく必要がある。そうすると、特性のあるお子さんもその多様性の中で、自分の良さを発揮しながら生活できる、勉強出来るっていうことに必ずなっていくと思います。特別に高度の専門性を必要とする子どもさんは、勿論そういう手立てに重きを置く必要があると思いますけれど、それが実は、岐阜県や愛知県が先進的に取り入れているいわゆるイエナ教育プランの中で、異年齢集団の中で遊んだり、過ごしたり、勉強するっていうことをやっていく中で、普通に子ども達が学んだり遊んだり出来る。大きくトラブルになって、先生みんなが走っていかないといけないというような状況も、私達が参観した中では全く見受けられませんでした。自分がやるべき課題を先生から受け取ってそこでやっています。グループの中に必ず入らないといけないということでもなくて、今日は入る気持ちになれないという時には、グループのちょっと外れたところで自分の課題が出来ていると。今年からはそういう教育を目指していかないといけないんじゃないかなというところで、先進的に進めていけば、子ども達にとってもいい教育が出来るんじゃないかと考えています。

浜田委員

それともう1つ、結果的に行政職の場合やったら、県や大学もそうなんですけど、経験的に初任者からすぐ自分の、1人だけの仕事というのはなかなか少ないんですよ。仕事は経験を積んでから異動しても、誰かと一緒にやる。けど、小学校とか中学校の教職員は、自分が全部やっていかないと、特に小学校なんかは。だから学力テストとかいろんな調査があるわけですけど、初任者が受け持っておるクラスは、香美市の場合は、はっきり言って低い状況です。それは経験と、それを補うものが結果的に支援する必要がある。センターやったり研究所でこういうふうにやったらというような形で学校を支援し、総合的に香美市の教育を支えている。香美市の場合も、繰り返しますけど、初任者の受け持ったところは、はっきり言って十分な、出来てないんじゃないかというような数値になっています。まあその辺を含めて、授業や子どもたちの特性を研究し、学校を支援する機関が必要ですので、総合的に考えていただければ大変ありがたいなと思います。

川田総務課長

ご意見、他に。教育長、構んですか。

白川教育長

済みません、終わりました。

川田総務課長

その他ご意見等ございませんでしょうか。構いませんか。

そしたら、無いようでしたら、いいですかね、市長もいいですか。無いようでしたら、これで令和4年度第1回香美市総合教育会議を終わります。大変疲れ様でした。ありがとうございました。